
記憶をなくした天使

浜達葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

記憶をなくした天使

【Nコード】

N1870Y

【作者名】

浜達葵

【あらすじ】

現代から何百年と過ぎた時代のこと。

魔術は退化し、科学が世の中のほとんどを占める時代。

高校生、萩村修也（あはらむらむしゅうや）は

塾の帰り、運命を変える大事件に遭遇する?!

そんな未来の物語。 はじまりはじまり

第一話 プロローグ(前書き)

長編2作目です。

誤字脱字等アドバイスありましたら

どんどんご指摘ください。

第一話 プロローグ

Itは退屈だった。

何万年という時間を過ごしてきた。

その時間全てが退屈だった。

いつからこんなことになったのかもわからない。
だれにもわからない。――

Itは気付くとこの部屋にいた。

この部屋は、先祖代々封印され続けられていた部屋だった。

何度も、この部屋に近づくな、と厳命されていた。

また、何度もこの部屋に近づいて罰を受けた者もたくさん見てきた。
自分は、そんな馬鹿なことはしないと信じていた。

だが退屈は、時に全てをねじまげる――

Itはなぜかその部屋を開けることができた。

しかし、Itは本能的に、その部屋に入ろうとしなかった。
この部屋はやばいと本能が告げていた。

今日も、Itはこの部屋にきた。

そして、またこの部屋の扉を開ける。

しかし入ろうとはしない。体全てが、拒絶をしているかのようだ。
戻ろうか――こう思っていた矢先、

???「誰かそこにいるのか!!!」

何だ？誰かが来たのか？こんな時に？

このままではやばい、すぐに逃げなければ。

だが、それはすぐに気付く。

ここは一本道で、逃げも隠れもできない、ということ。

しかし、それはあきらめない。

なぜなら、それはその部屋に近づいて罰を受けてきた者を見てきたから。

そして、捕まったが最後、どうなるかも分かっていたから。

最悪処刑、少なくとも無事ではすまない。

ならばいつそ……

それはついにその部屋に入ってしまった。

もう後には戻れない。

そう思った時、ゾクリ、と背筋に冷たいものが通ったような感覚があった。

そして見る。

じつら
扉を。

大きい。といった言葉では語れないほどの大きさ。

そしてそれは驚愕する。

この部屋に扉以外の一切が置いていないということに。

そして、その扉には数えきれないほどの札が貼ってあるということに。

おそらく、千を超えるであろうそのおびただしいぐらいの数。

それに、そのひとつひとつにおいて、それ自身がパツと見ただけで

もわかるような

強力な札を使っているということに。

イトそれはその光景に驚愕した。

しかし、いつまでも驚いてはいられない。

すぐそこに人が来ている。

罰、なんてことは考えられなかった。

早く、その扉にでも入らないといけない。

そしてイトそれは一步踏み出した。

その時である。

体中がまばゆい光に包まれた。

しかし、攻撃的な光ではない。

やさしく包み込むような光。

体全体をおおい、やがてイトそれは見えなくなっていく。

やがて、その光は消えた。

しかし、そこにイトそれの姿はなかった。

????「誰かそこに……ん？これはまさか?!だれか!だれかいな
いのか——!?!」

いまから何百年も後の時代。

おそらく永遠に語り続けられるであろう、大事件。

「ノートメモリーエンジェル
記憶障害天使」

の語彙のついでに

第一話 プロローグ（後書き）

中学3年です。

意味不明ですみません……

第二話 謎の出来事（前書き）

続きです。

場面がいきなり飛んでますが

ご了承ください。

プロローグを読んでいない方は読むことをお勧めします。

第二話 謎の出来事

この俺、萩村修也はぎむらうしゅうやは今、人生の窮地に立たされていた。

まだ人生16、7年しか生きていない奴が、なぜいきなりそんなことを言い出したのか、
という所なのだが、

原因は、この冷たい空気だけを流し出している箱はこ、のことである。
しかし、箱、と呼ぶには少し大きくて、しかも何段にも分かれて
おり、複雑な構造になっていることから、
これは単なる箱、と呼ぶにはふさわしくないのかもしれない。

だが、中には何も入っていない。文字通り何もなにである。

ではこれは何だろう？といった所なのだが、
実は残念なことに、俺はこの物体の正体を知っている。
その正体は、

食品等の物品を低温で保管することを目的とした電気設備施設
あるいは電気製品。

まあ簡単に言つと、

冷蔵庫れいぞうこである。

いやしかし、

この16行にもわたつてのくだりのオチが、こんなどうしようもないオチで申し訳ないのだが、
一人暮らしの高校生にとつて、冷蔵庫の中身がないというのは、
相当な苦痛だ。

なにせ、調味料すらもきつちり使い果たしていたのだから、
明日から食べていくものがない。

それよか今日の晩メシすら食べられなくなってしまった。
もちろんご飯が残っているはずもないので、まさしく食べるもの
が何もないというこの悲惨な有様である。

パンやお菓子類も全滅。ここまで来ると笑いが出てしまうぐらい
の見事な空っぽである。

なら買いに行けばいいじゃないか、と考える人もいると思う。い
やたぶん全員だと思う。

しかしそういうわけにもいかない事情がある。
それを話していくとまた話が長くなってしまつので、また簡単に
言つと、

財布の中身も冷蔵庫状態である。

あの札束（束というくらいはないが）や小銭がたくさんあって、
ポカポカしていたあの頃はどこへ行ったのやら、
いまやすつからかんである。

たとえるなら太陽と北風の、北風だけがガンガンに当たっている
かのような寒さっぷりである。

まあしかし

こんな財布も冷蔵庫もすつからかんになったのは、一応理由があ

る。

時は遡り十日前の七月二十日の頃

「みなさーん明日からは待ちに待った夏休みです。時間を無駄にせず、一日一日を大切にしてくださいねー」

と担任の声が響く。

もはや定番と言っていいほどの夏休み前の担任の言葉なのだが、この言葉を聞くといやでもわくわくするのはなぜだろうか。

「学生の本業は勉強。これを忘れてはいけませんよー。というわけで今回の夏休みの補習生を発表しまーす。」

ええー。まじかよー。と周りがざわつく。

それもそうだろう、一年に一回しかない、せつかくの夏休みを潰されるのはいい気分ではない。

補習かかりませんように、かかりませんように、という思いがこの教室中を埋め尽くしている。

ちなみに、説明しておくくと補習という物だがこれが相当ハードなものである。

聞く話によると、補習で夏休みが丸々潰される人もいたらしい。

なぜかと言うと、この補習が決められた時間ではなく、決められた課題で行われる物なので

できなければ永遠に補習が続くことになる。

また、話によると十秒で終わらせて帰った人もいるらしい。

それじゃ補習意味ないじゃん、と思わず突っ込みたくなるような話なのだが

本当にあったことらしいので驚きである。

「……村上くーん、水木さーん、長谷川くーん、……」

そうしている間に発表がされていたらしい。

選ばれた勇者達フレインメンは

一瞬、この世の終わりのような顔をするが、それは一瞬で、すぐに決意に満ちた顔をするようになった。

どうやら十秒で終わらせて帰るつもりらしい。

そんなに簡単にいくはずないと思うのだが……まあできないとは限らないし、がんばればいいと思う。

「三木さん、数鳥くん、そして……萩村くん。この人達が今回の補習です」

「へっ？」

思わず間抜けな声を出してしまった。

「なんで俺も？」

自慢じゃないのだが、俺はそこそ成績のいい方を保ってきたし、欠席もほとんどしていない。

だから自分だけは呼ばれないと思って油断していたために、これは驚きだった。

っていうか、いままでの俺の地の文が思いっきり上から目線だったから

まさか、俺が呼ばれるとは思わなかった、でもなぜ？

いや待てよ、心当たりが一つだけある。もしかして……

「なんでって……そりゃあ決まっているじゃないですか。」

「????？」

ディ>エクトマジンヤン
「欠陥術師だからですよ。」

……
あーあ、やっぱりそうなるか……

いまから、何十年もの先の時代。

科学が進化し、魔術や呪術が退化し、衰え、なくなっていくた世界。

進化した科学の力は予想以上の発展を遂げた。
車が空を飛ぶようになり、その技術を応用し、ついに人までもが空を飛べるようになった。

そして人類はついに、人間の潜在能力せんざんのうりょくの引き上げを可能にした。

もともと人に眠っている潜在能力という力を、科学の力で引き上げさせて、あらゆる能力の実現に成功した。

掌から炎を出せる人が出てきた。

瞬間移動テレポートをできる人が出てきた。

時間を操れる者も出てきた。

そして、まさに今の子供たちが夢見ていた、魔法の世界が誕生したのである。

しかし、そんな世界にも落ちこぼれという者は存在する。

周りは能力を身につけ、特別な力を手にしたというのに、

自分は能力を身につけることができない。

特別な力を得ることができない。

そんな人達のことを、人々は欠陥術師ディフェクトマジシャンと呼ぶようになった。

俺はそんな人達と同じ仲間なのである。

しかし、だからといって言われなき迫害を受けたり、差別を受けたりすることはほとんどない。

周りと同じように扱われるし、同じように生活する。

だが、やはりこういった時に差別を受けるようなことになるのは避けようもない事実である。

そこから、俺は少しやけくそな気持ちになっていたのもあって、補習の時間が終わって、家に帰ってやけ食いや、友達を誘っての残念パーティ（補習組の）を開いたこともあってか、冷蔵庫の中身と財布の中身が、面白いようになくなっていった、

今に至る。

「ハア……なんというか……不幸だ……」

そんな捨て台詞を吐いて俺は

空腹を紛らわすためにとりあえず寝ることにした。

明日からは塾も重なるし、体力を温存しておこうという

自分なりの戦略である。

しかし、育ち盛りの高校生がご飯を抜いて寝られるはずもなく、すぐに空腹で目が覚めてしまった。

「ほんとどうするか……」

ここで選択肢。

? お金が落ちている事を願ってうるうるする。

? 今から何か買いに行く。

? 寝て起きたら、全て夢だった に賭ける。

そして俺は即答する。

「？」

ほんとチキんな俺である。

とりあえず考えてもお腹が空くだけだと思ったので

今日はとりあえず無理やり布団に潜り込んで寝ることにした。

第二話 謎の出来事（後書き）

誤字脱字等

こつしたほづがいいなど

アドバイスありましたらどんどんご指摘ください。

第三話 補習???

じりりりん！！！！じりりりん！！！！

とつるさい音が部屋中を埋め尽くした。

こんな科学が進化して、いろんな便利グッズや素敵アイテムあふれる世の中で

少し一昔前の目覚まし時計だと、一発でわかるような音である。

だがおかしなもので、一言もその名前を言っていないのにも関わらず、

音だけでそれが何なのかが分かってしまうのは、なんとも不思議なものである。

いずれかは音だけで会話ができるような日が来るのだろうか。

と、そんな未来(?)のことを考えている萩村修也高校生なのだが、

当てにならない未来よりも、今が大切だとも考えている萩村修也高校生なので

その考えはまた後にすることにし、今しなければならぬ最重要目的を果たすことにした。

そう、この目覚まし時計である。

未来(?)のことをずっと考えるあまり、ずっと鳴りっぱなしなので

そろそろ止めなくては、と思い時計を止める。

しかしそれと同時に、こんなつるさい物誰が考え付いたのだろう、と思う。

朝から大音量で音を流すことで、起そうとしているのだろうか、

近所迷惑にはならないのだろうか。

「んあー起きます起きますよ……」

そう言いながら萩村は、止めた目覚まし時計をわざわざ横向きに倒す。

そうやって反対側に倒れてしまった時計を見て、優越感に浸る自分なりのささやかな反抗である。

そして布団から這い出てくるまで1分。

補習があるのを思い出し、がつくりうなだれるまで1分。

それから、気持ちを入れ替え、補習を早く終わらせようと決意するまで1分。

きっかり3分で、今日一日の過ごし方完了。

カップラーメンもびっくりである。

やはり時間は大事にしないと。と我ながら自分の貴重面に感嘆し、

時間を大切にする上で一番大事であろう、現在時刻を確認することにした。

掛け時計がちょうど柱の死角になって見えなかったのだ

(起きて見えない位置にある掛け時計はどうかと思うが)

仕方なくさつき倒した時計を見て、もう一度優越感に浸りながら時計を元に戻した。

「さあーて、今何時だ？」

補習は8時30分から。

いつもの登校時間と変わらない時間で、いまいち夏休みという実感がわかないのが残念なのだ

まあ、早く終わらせて夏休みを満喫しよう!!

とひそかに萩村は決意をし、横倒しになってあった時計を見る。

が、それも気付かないくらい鈍感さである。

まあしかし座るようにと先生は促してくれているので、とりあえず適当に空いている席に座ることに。

ただ、パツと周りを見て、あれ？いつもの教室と同じ？と萩村は感じたのだが

ここはれっきとした補習専用のスペースである。

しかし大きさは普通の教室程度で、机や椅子も教室とほぼ同じように並んでいるので

気付いていないだけで、微妙に普段使用されているような教室とは違った仕様になっている。

学校側が特に大型連休などの時に開放するスペースで

一通り空調設備も備わっており、一応夏バテなどの心配はなさそうにできている。

教室とほとんど変わらない空間なので、わざわざ別に教室を用意する

必要はないと思われるのだが、よくみると少し普通の教室と違う所があった。

いや、厳密に言うとなんか教室ではなく教室の中にいる先生の方で、

しかも先生が、普段教室では絶対にしないように、と念を押していることをしていたからである。

つまり、今先生が手のひらから出している真っ赤な火とかが

「ちよっ……！！何をしていますか先生！！！」

「はいはい、遅れてきた萩村くんは静かに。みなさんにはもう説明したのですが

萩村君のためにもう一度だけ簡単に説明します。と言いつつ説明することなんかあまりないですけどね」

「……説明??？」

「はい、この補習の内容です」

未だに状況が掴めない萩村だが、とりあえずどんな内容なのかを考える。

（まさかこの前にやった能力観点別テスト100問とかか?! いや待て、

それならわざわざ校則を破ってまで先生があんなことしないはず、ならば何だ?!

まさか潜在能力覚醒プロジェクトなんてニュースがやっていたがまさか?!?!?)

なんてことを考えていた萩村だったが、次の先生の一言はそんな考えを一気に吹き飛ばすものだった。

なぜなら。

「この補習の内容……それは、先生と戦い、先生を倒すことです」

こうして、萩村の平穏な夏休みは終わりを告げることになる。

第三話 補習???(後書き)

誤字・脱字・指摘・アドバイス等ありましたら
自由に感想ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1870y/>

記憶をなくした天使

2012年1月12日01時00分発行